私の震災体験

国立病院機構　静岡てんかん・神経医療センター
副院長・神経内科
溝口功一

東日本大震災で被災された方々にお見舞い申し上げます．一日も早い復興をお祈りしております．

さて，これを書いているのは，平成23年４月14日で，震災からおよそ１カ月が過ぎた時点です．３月11日，私は東京の新橋で会議に出席していました．14時半過ぎに大きな揺れを感じましたが，会議はそのまま続行され，17時過ぎに終了しました．その間，ずっと，大きな揺れと小さな揺れが繰り返し起こっていました．どこが震源なのか，どの程度の地震なのか，わからないまま，不安な時間を過ごしました．会議終了後，同僚と新橋駅に向かいましたが，JRが止まっているため，駅には人がたくさん集まっていました．静岡に帰れないかもしれないと考え，同僚と宿泊できるところを探しました．しかし，新橋駅周辺のホテルに，宿泊できるところはありません．あきらめて，徒歩で，東京駅に向かいました．東京駅でも，当然，JRは止まっており，「復旧の見込みがないため，徒歩で，帰宅してください」とのアナウンスがありました．タクシー乗り場と公衆電話には長蛇の列ができており，移動するにも，連絡を取るにも，時間がかかりそうな状況でした．途方に暮れたまま，同僚と，東京駅構内で，二人で相談するともなく，時間を過ごしていました．すると，19時頃，新幹線が動き始めたという情報が入りました．これ幸いと，切符を買って，新幹線に乗車し，通常の１時間のところを，２時間以上かけて静岡に着き，無事，自宅に帰ることができました．

新幹線に乗ることができ，落ち着いたところで，考えたのは，難病患者さんたちのことでした．私は，厚生労働省の研究班で難病患者の災害時の支援というプロジェクトチームに参加していました．このチームでは，阪神淡路大震災などの経験をもとに，難病患者さんたちの自助を促すとともに，近隣の方たちの共助や行政的な公助について，検討し，提言することを目的としていました．ご存じのように，難病患者さんたちは，運動症状のため，ご自分で避難は困難で，しかも，医療依存度が高いため，停電などが直接命にかかわる可能性が高い方たちです．

そういった方たちが，今回の震災で，どのような被害を被ったのかは，これから明らかになってくると思いますが，これまで提言してきたことが活用されたのか，また，本当に有用な提言だったのか，心配しています．

今後は，震災からの復興が喫緊の課題です．が，それとともに，今回の震災の経験を生かして，災害から守っていく仕組みを，もう一度，考え直さなければならないと思います．その中の一つとして，災害弱者としての難病患者さんを守っていく仕組みが，結果的に，他の災害弱者の方たちや私たち健常者にも役に立つ仕組みとなるはずです．皆さんと一緒に考え，構築に協力していきたいと思います．